

にはならなかった。

長い行軍であったが、夜間行軍である。昼間は敵の空軍が制空権を握っているので、行軍できない。昼は人家や森林の中に隠れている。行軍の距離も伸びない。また食事のため米を洗って炊飯する。大陸の黄色いにごり水しかない。内地ではシラミ、マメ、マラリア、病気、水、その他考えられない悪条件の重なり合った中ででの生活、というより生存であった。

戦後に生まれた若い、戦争中の労苦を知らない国民に、このような昔のことを言っても十分な理解ができるであろうか？ 日本の国の将来を考えると、このままの平和ボケでよいのかと不安になる。

昭和二十年九月の終戦後、馬受領に部隊全員が編入され、河南省の奥地で蒋介石軍に抑留された。

昭和二十一年四月、内地帰還のため上海到着。

上海港より博多へ。上陸復員帰郷する。

帰宅後は農業をやって現在に至っている。復員後生まれた子供は女の児ばかりで四人。孫は八人恵まれ、私共老夫婦はじめ全員健在です。

終わりに、支那大陸まで出征して、無事に命あつて生還できましたが、実戦に参加する機会に恵まれず、「シラミやマメ」との戦いという労苦ばなしです。

従軍記（一）

湘桂作戦を追及して

石川県 村井藤一

入隊

十九歳の頃、私は舞鶴海軍工廠に勤務中に肋膜炎になり、工廠を解雇されて家業の万頭屋を手伝っていた。この年、徴兵検査で視力が、〇・〇八で第二乙種合格だった（甲種でも、乙種でも合

格と言う)。臭覚の検査があつて、何のためかと思つていたら「ガス部隊ではないか?」と言われた。

翌年の昭和十九(一九四四)年六月十三日、群馬県の沼田の迫撃砲第一連隊に「入隊すべし」と教育召集令状を受け取つた。この頃、近所のあの人も、この人にもと召集令状が来て、出征兵士を送る家には何本も幟がはためき、万歳の声に送られて軍隊に入隊していった。

私も覚悟はしていたが、心は穏やかでなかつた。生きて帰れるか? と不安だつた。しかし、当時の環境は「天皇陛下のため」とか「国のために命を捧げる」というのが名譽だとの認識が普通であつた。父親も案外喜んでいたようだ。

郷里、松任町からは同学年の木沢君と二人だつた。二人は父親に付き添われて沼田部隊に入隊した。父親は帰りに伊香保温泉に一泊したと後に話をしていた。

入隊した初年兵は関東地方、東北地方の人が多く、また、年令差があり、私達は一番若くて二十歳だったが、三十歳を超えて世帯を持つている人、社会的地位のある人も多かつた。戦局も逼迫しており、食事も高粱入りの御飯だつた。

新兵の教育係は優しくて理知的な人だつたが、軍隊のしきたりがあり、時には注意して殴つたり、またこんなこともあつた。班内の防火用水に煙草の吸い殻が捨ててあり、初年兵を集めて「誰が捨てたか名乗り出よ」ときつく言われたが、誰も返事をしない。そのうち一人が「私が捨てました」と申し出た。「よし、お前は列外に出よ」と言い、残つた全員に「齒を喰いしばれ」と、革のスリッパでビンタを取られ(殴られ)たこともあつた。

教練の時、迫撃砲の模型の弾丸で指に裂傷を受けて練兵休で休んでいる間に、グアム島行きの選抜があり、私は選から洩れて残念で、村上と言う戦友と、中隊付の准尉にグアム島行きに加えて欲

しいと頼みに行ったが「駄目だ」と言われ、後に考えると、これも運命だった。グアム島に行った者は全滅で、横井さんが一人生きて帰った。

毎日、きびしい訓練が続ぎ、三カ月が過ぎた時、順番に名前を呼ばれ整列すると、班長が「お前達は、赤紙の召集になり支那に派遣されることになった」との命令が伝えられた。家に外地に行くことになったと手紙を出した。母が食べ物を山程持って面会に来てくれ、沼田に一泊して、翌日出征を見送ってくれた。

沼田から軍用列車で東京を経由して、二日かかって博多に着いた。到着してすぐ、六〇〇〇トンの輸送船に乗船した。

大陸列車の旅

朝鮮の釜山に上陸し、大陸横断の汽車に乗り込む。座席は板の腰掛けだった。これからの一週間かけて南京まで走るのだ。窓から見る朝鮮の風景は禿山が多く、民家も貧弱に見えた。当時の朝鮮は日本国であり、日本内地と変わらず、出征兵士

を送る風景がよく目につき、日本と同じで幟を立て、兵士は赤襷を掛けて軍隊に入る様子だった。

列車は奉天（現在の瀋陽）を経由して北京で、万頭が二個ずつ給与された。広々とした大地は高粱が広がり、所々にある小さな土万頭が点々として目に入って来る。何かと思ったら墓だと教えられ、成程土万頭の上に白い旗が立っていて、御供物があったりした。

南京に着く前の二日間給食が無く、携帯している乾パンを一つ二つこっそり食べた。板の椅子で腰が痛くなるし、腹はへるし、淋しい気持ちになった。列車の中ではつきり覚えていないが儲備券（中国で使用できる紙幣）と両替した、十円が二十円になったが、生菓子が一個五円もして驚いた。

武昌にて

昭和十九年十月頃、南京から揚子江を輸送船で、武漢三鎮の中の武昌に向かって、二泊三日で遡った。途中初めて機関銃弾の襲撃を受けたが、

夕暮時に武昌に上陸した。

所々戦禍の跡も生々しく残っている。宿舎といっても、ガランとして何も無い建物だが、以前は裁判所だったそうだ。その前庭で「指示あるまで休憩」となったが、突然飛行機の低空飛行の音がしたと思うと、大きな爆発音が何回もして我々の休憩している所まで、破裂した銃弾がピュンピュンと飛んで来る。皆初めての銃弾の洗礼を受け、怖さと興味で、前線であることを認識する。

弾薬庫が狙われたのだ。隊長が慌てて、兵等を建物の内に避難させた。この建物が、五日程の住家となった。

一日の自由行動が与えられて、仲の良い戦友と行動を共にした。街に出て見ると、さすが大都市で、人が大勢いて賑やかだ。道路で色々の商売をしている。歯の治療をする者、床屋があり、食物の店、煙草を巻いて売る人など、種々雑多な仕事をしていて、町は活気に溢れている。また、揚子江のこれ程上流へ来ても、その広い川幅の凄さ、

数知れぬジャンクが停泊している。道すがら露店で風景写真を買って家へ送った。これが最後の便りになった。

次の日に空襲を受けた弾薬庫の後始末に狩り出された。その折聞いた所によると、中国の民衆が米軍に協力して、日本軍の弾薬庫の方向に火を点して、爆撃機を誘導していたそうだ。ちなみに一般民家には電灯が無く、夜は暗いのだ。中国人は日本軍に対し、いかに憎しみを持っているか良く判った。

現場に行き空爆の跡の惨状を見て廻る。宿直室の六人の兵士が犠牲になったと説明を聞く。それから屋外に出て、散乱している薬莢、不発弾の破片などを集める。私は、たまたま大きな薬莢、不発弾丸の破片などを集める。四〇センチ程の頭を持ち上げた尻の方からポッポッと赤い炎が上ががる。廻りの兵隊が皆、ワーツと逃げる。私は一瞬とまどったが、慌てて走り逃げた。後で考えると、もし爆発したらと思うとゾーとした。

その時、「蠍サゲリがいるから、編上靴の中を注意して履くように、蠍は革の匂いが好きだから」と言われて驚いた。そして、その頃から虱シロムシがはやり、虱との苦勞が始まった。

夜行軍

隊長の訓示で、これから夜行軍で桂林に向かう。昼間は空襲があり行軍ができない。約一カ月間の予定だ。「桂林の迫撃第一大隊と合流するまで体に注意して頑張って欲しい」と、いよいよ前線へ向かうと思うと心が引き締まるが、余り感動は無かった。

夕方武昌を出発して桂林に向かったが、これから後方からの軍需物資の輸送もなく、着た切りの行軍が始まった。夜が明けると空家になった民家に入り、炊飯して朝食を食べ、夕方また飯盒で飯を炊き行軍が続いた。月の明るい晩は行軍も楽だが、雨が降ったり、月明かりの無い暗い晩は苦勞して歩いた。

少しずつ行軍に馴れてきたが宿舎に着くと、水

筒に玄米を入れて棒で突いて、白米にして食べた。手持ちの米が段々心細くなってくる。

そのうち学校で習った洞庭湖が見えて来た。教えられた通り大きな湖で、雁が列をなして飛んでいる。遠くにかすかに町が見え、塔がいくつも建っていて、その眺望がすばらしい。しかし、増水期で道路も水に沈んでいて、細い道を苦勞して歩く。

この頃になると行軍にも慣れて、鉄帽をかぶり、銃は横にして背の上にして歩く。鉄帽は長く被ると重くて首が痛くなった。

長沙の宿舎に入ると軍需品受領だと狩り出され、また墓の土万頭の中を三キロも歩かされて米を受領した。一人一袋貰って帰る、二キロ程入った袋だが、中は糲だった。宿舎に持ち帰り、今夜は糲擦り臼でギョギョと擦って皮を取り、トミという木製機械で糲殻を吹き飛ばして玄米を取る。それを水筒に入れて棒で突き精米にしてどうやら飯にありついた。

行軍も状況次第で、昼間に歩くこともある。季節は晩秋になっていたが南の方に下がっているのが気候は寒くなく、歩くのには楽だった。軍用道路のあちこちに空襲でやられた軍用車の残骸が放置されていた。

行軍していると、砂糖黍の畠がポツポツとある。行軍中、それを切って腰に差し歩きながら噛んだ。また敵戦闘機が見えると機関銃で応戦する兵隊もいたが、大概の兵隊は我先に逃げる。わけでも将校は一番先に逃げた。

宿営地に入る。どの部落も大小の差はあるが、高い土塀で囲んでいる。外敵に備えてだろう。家も土煉瓦で作っており、中は土間でテーブルや椅子があり、寝室にはベッドがあり、下に便器もある。少し匂うが便利なのだろう。また家の玄関には読めないが、赤い長い紙に墨で、色々書いて縦横に貼ってある。呪であるらしい。

大きな町には、たまたま寺院があった。中に入ると見ると仏像が祭壇に祭られていたが、戦禍

で腕が折られて寺院の中は無残にも荒されていて、心ない者達の仕業と残念に思った。若者は逃げていないが時々年取った女の人は見掛けた。中国では昔から女の子の足を布でしばり、大きくしないようにした纏足てんそくという女の人の見掛けた。

ある宿営地で長屋形建物の寝台があり、病人が横たわっていた。裸で掛布団も無い。これは治療所か病院のようだ。匪賊が住民か誰かを丸裸にして奪っていったのだろう、余りにも無慈悲な戦争犠牲者だ。

南京からずっと目につく日本の看板があった。雑誌「キング」の絵に「仁丹」と書いてある。また塀や壁には「排日」「抗日」と大書してある。その中で、この「仁丹」の広告は我々の目には不思議な存在感があった。

その当時、我々でも日本軍の飛行機が一機も飛ばず、たまたま爆音がすると米軍機だ。完全に制空権は敵の手にあると思った。「空襲だ！ 散開！」と号令されても逃げ場は無い。ただ道路か

ら離れるだけだった。たまたま日本の軍用車が走っていた。敵機は低空で銃撃を加えてきて車は爆発炎上し、兵隊は即死だった。こうして行軍中、湘桂作戦の戦没者の墓標があり、敬礼して行軍を続けた。

夜行軍の続く中、我々は何を思いつつ行軍していたろうか。何せ五十何年前のこと、はっきり記憶はなくなったが、皆、どうでも良い、なるようになると思っていたような気がする。

雨の夜行軍は、わけても辛い。装具は濡れる、重くなる足、ぬかるみに疲れる。宿舎に入っても軍装や装具、脚絆（ゲートル）を乾かし、銃剣の手入れをする。それから休むので大変である。後方から物資の輸送がないので、自給自足の行軍が続く。衝陽あたりになると煙草もなく、煙草島の葉を取って、洗面器で葉を煎り、紙に巻いて即製葉巻にし満足している者もいた。

日本の治安部隊の警備地区での徴発はやかましく禁じられていた。治安を回復して協力的な中国

人の地域での行動はやかましく禁じられていた。広東・広西地区では製糖が盛んで、行軍中の砂糖黍晶は兵士にとっても疲労回復に役立たせてもなかった。……それも地元住民にとっては迷惑なことであった。

補給なき戦いは、日本軍にとっても、中国軍にとっても、苦しい戦いであり、当然、戦場となった中・南支住民にとっては、大きな迷惑な犠牲であったのだ。また、日本軍は、桐の油を食用油と違って天麩羅油にして喜んで食べたが、全員食当たりというか苦しんだ。桐の油は雨衣の防水用として使うもので、食用ではない。中国では日本軍兵士は大変苦い体験をしている。

広東・広西省は、南支に属する。

着のみ着のまままでの長い間の作戦で、シラミが生活の敵となって来た。着衣を煮沸してシラミを殺す。

行軍は続き、有名な桂林が近くなるにつれ山の形が段々と変わってくる。平地からニョキニョキ

と筈のごとき岩山がある。南画の世界だった。住民は気性が激しく好戦的、油断ができない、少数の行動は危険であると注意を受ける。

桂林に着いてから駐留地は柳州だと言う。日本里で九里（三十六キロ）の先に我々の目指す迫撃第一大隊が駐屯している。柳州近くまで貨車の荷物の上に乗せてもらい目的地へと向かった。